

# 教師が自分自身を理解するには

早稲田大学

## 相 場 均

この問題の一番基本的な問いは、いったい人間はどれだけ自分自身のことを知ることができるだろうか、ということに始まる。答えから言ってしまうと、それはなみたいていのことではない。

われわれの人格には、防衛機制とよばれる一つの機能があって、われわれの自我が傷つかないように守ってくれている。こうしたメカニズムが時にはわれわれの人格の中心にあるものとは全くちがった自分を作りあげてしまうこともあって、そうした場合にはいよいよ複雑になってくる。

傲慢でよそよしいようなタイプの人が

冷血で無神経とは限らない。しばしばそうした傲慢さとか、よそよしさは、気の弱い、ちょっとしたことで心も傷ついてしまうような人の保身的な態度で、むしろ傷つきやすい自我を守るための防衛機制かも知れないのである。

たとえば、電車の中で、一人の老人が坐っている自分の前に来てつりかわにぶらさがっていると。気の弱いてれくさがる人は、その老人には気の毒だと思いながらも、すっと立って、席をゆずってやると言う、その人にとっては、はでな行動はおもはゆくてなかなかできないのである。

こう言ったタイプの先生は、過敏で神経質で、教室でも職員室でも気をまわすすぎて、いつもとりこし苦労をしてしまう。人は自分のことを、こう思うだろうと、いやそうではないだろう、と考えすぎて、スムーズに行動できないことが多いのである。

このタイプの教師は自分自身のことがよくわかっていのだろうか。

もしこの先生に、あなたの性格について、自己観察をしないと行って、一冊のノートをあたえれば、おそらく、ぎっしりと、こまかく、自分自身を分析したメモを書いて出すことができるだろう。

心理学者にとっては、こうした教師の自己分析は大変役立つし、面白いデータになるかも知れないが、このことは直接には、教師が自分自身のことをよく理解していることにならない場面も多い。つまり、あまりに自分のことを考えすぎて、他人が、とくに子どもが、自分をどう考えているかということから遠くなってしまうからであ

る。

自我意識の過剰の例としてこういうのがわかりやすい。「学生が新しい帽子を買ってかぶり始める。そうすると電車の中でも、バスの中でも、みんなが自分をみて、ああ新入生だなと思ったりする。」この例のように、この学生は新しい帽子のことばかりを考えて、みんなが注視すると考えるけれども、世の中の人々は、それほど他人のことには注意を払わないし、結局、その学生の一人ずもうのようなことで終わってしまうのである。

つまり、こういった教師は自分のことが、よくわかっているようで、かえって現実的にはわかっていないことになる。

今までのべて来たのは、防衛機制の働きによって、比較的気の弱い人が、外に壁を作ると言ったような例である。しかし、この壁はこの程度では、まだ、ひどく厚いとは言えない。

次にはそれがもっと厚くなって、心の奥

まで壁になってしまっているような例をとりあげてみよう。

今までの例では、外の壁は自分自身とはちがっていて、気が弱かったり、神経質すぎるために、つい別の態度が出てしまうと云ったようなことであったが、外の壁が自分自身なのか、単なる壁なのかわからなくなってしまうことさえ起るのである。

専門的な表現をすると、われわれの心を防衛機制によって合理化してしまうような場合である。

たとえば、ある子どもが憎らしくて、ひどくしかってしまつたとする。もちろん何かきつかけはあつてその子どもは悪いことをしていたかも知れない。その子どもが憎らしかつたと言うその先生の基本的な感情と、子どもが悪いことをしてそれをしかつてしつつけると言う教育目的が一緒に存在する場合、前者の感情を意識の下に沈めてしまつて「この子をよくするために！」と言う気持が前景にきて、すべてを合理化して

考える傾向の人も実際にはかなりたくさんいるのである。

「教育のために！」「子どものために！」と言うことだけを考へて、天職だけがその前景にきてしまうと、しばしばいわゆる先生タイプになってしまうのである。

先生も人間である以上、いろいろな感情がある。ある時は、よろこび、ある時はおこり、そして悲しむのであるが、すべてを教育者と言う立場からだけ考えると、だんだん意識がせまくなつて、すべてを教育と言う名のもとに合理化してしまう結果になってしまうのである。

ベルリン大学の教授ですぐれた教育者でもあつたオスワルド・クロウ教授は、教育者の自己教育を重視してそのことをくりかえし書いているが、それには、教育者の豊かな人間性が必要であることを説いている。子どもは、直観的に教師の感情をくみとる能力を持っているので、教師の高い情操（じょうそう）はことさら、大切なことなのである。したが

って、この第二のタイプの教師になつてしまふことはかえつて教育の本質から遠くなつてしまふのであるが、こうした教師は、不幸にして、一番自分自身のことからわからないのである。何か苦情が出れば、自分の教育目的を理解してもらえなかったのだと悲しむだろうし、感謝されれば、教師としての喜びにひたるのであるが、そこには、しばしば「教師」という形骸しか残らない。

今、かりに二つのタイプだけをあげたのであるが、性格学の立場からはもっと多く類型化することができる。ここでは例をあげたのに過ぎない。

次には、教育学の立場で考えられている教師のタイプをあげてみよう。

ミュラーフライエンフェルス氏は、次の四つの類型をあげた。

(一) 博識をもっている学者型

(二) その主な意向が外面的形式を正確に遵守することに向けられている官僚

型

(三) 厳格な紀律や挙動を維持することとその喜びとする将校・下士官型

(四) 生徒の内面生活に愛情をもつて入りこんで行く牧師型

性格学の複雑な考え方とはちがつて、この方はわかりやすい。

しかし、どの類型に自分はいるにせよ、教師が自分自身をよくみつめるためには、ゆとりを持って、むしろ教師の類型からは、はなれて、人間として、自らを見出すことが一番大切なことではないかと思う。

教育心理学の方では測定技術が発達してきて、子どもが先生をどう思っているかを統計的に調査している。

また臨床心理学や精神分析学の方では、教師の個々の内面的な性格に深くメスをいれて、自らの性格を知るのに役立ち、また性格をゆがみのない方に導いて行くこともできる。

しかし、先生方が、それによって直ちに

自らを知り、よりよい教師になれるかと言う、なかなかそうも行かないのである。

ミュラーフライエンフェルス氏があげている類型にしても、それぞれ長所と短所になる場合もあって、どれが一番よいとは、決定的には言えないし、各々の教師は、すこしずつそのどの要素をも持っているのである。

やはり結論としてはクロー教授が言うように、自分自身の人格を高めることで、これが自然に自分への理解になるのではないだろうか。

川村短期大学

帆足喜与子

他人を理解することは精神発達の順序からいって、自分自身を理解することに先だつと一応考えられる。しかし、理解という